

## 「存亡の危機」は誤りか？

「存亡の危機」という表現について、番組の制作担当者から問い合わせを受けた。放送でその表現を使ったところ、視聴者から「間違いではないか」との指摘を受けたというのだ。確かに、辞書の用例でよく見かけるのは、「危急存亡の秋<sup>とき</sup>」である。中には「存亡の危機」は誤りであり、「存」か「亡」かの瀬戸際を意味する「存亡の機」が正しいとする書籍もある。

もともと「〇〇の危機」ということばは、やや特殊な面を持っている。「絶滅の危機」という場合もあれば、「存続の危機」という場合もあるからだ。つまり「絶滅の危機」であれば、危機の内容そのものを〇〇が指していることになり、一方「存続の危機」であれば、「〇〇が危ぶまれる」という意味となる。

すなわち「〇〇の危機」は、両方向の意味で使えるものの、「存亡」のように、〇〇に正反対の語を並べたものの場合には使えない、というのが誤用の根拠となっているようだ。「存亡」とくるのであれば、「危機」ではなく、「存亡」をかけるような場面、局面という意味で「機」「とき」を使うべきだという主張である。

本来は、故事である「危急存亡の秋<sup>とき</sup>」のような使い方が主流であったのかもしれない。しかし、もはや、その使い方は実態としてはあまり見られなくなり、「存亡の

危機」が、例えば「国家存亡の危機に直面する」などのような形で使われることが多くなっている。国立国語研究所が構築したコーパス（ことばのデータベース）を専用ツールで分析してみても、この「存亡の危機」は、「存亡の機」「存亡の秋<sup>とき</sup>」を圧倒している。

理屈からするとおかしな日本語ではないかと思える向きもあるかもしれないが、「存亡」のように、意味の対立する語が組み合わさった熟語については、「帯説<sup>たいせつ</sup>」と呼ばれるとらえ方もある。「難易度」の「難」と「易」、「恩讐<sup>おんしゅう</sup>を超えて」の「恩」と「讐<sup>しゅう</sup>」のように、対極の意味を持つことばが組み合わさった場合、片方の語（「難易度」であれば、「易」、「恩讐<sup>おんしゅう</sup>を超えて」であれば「恩」）が意味を失うという現象である。中には、「『難易度が高い』は意味がおかしい。『難度が高い』の誤りではないか」との主張もまれにあるが、「帯説<sup>たいせつ</sup>」の考え方によれば問題は無い。

ある通信社の記者ハンドブックの最新版からは、それまで「誤りやすい表現」の一つに掲げられていた「存亡の危機」が消えた。聞くところによれば、「一般化している」ととらえるべきとのことだった。ここまで使用の実態が広がっている以上、妥当な判断だと思える。逆に「存亡の機」「存亡の秋<sup>とき</sup>」という表現こそ、まさに今、「存亡の危機」に立たされているといつてよいだろう。

田中伊式（たなか いしき）